

小樽市不登校対応マニュアル【概要版】

1 本マニュアル策定の趣旨

- 不登校に関しては、「魅力ある学校づくり・学級づくり」を進めると同時に、要因・背景が多岐にわたることを理解した上で、多職種の専門家や関係機関と連携・協力しながら、個々の児童生徒の状況に応じた具体的な支援を展開していくことが重要であることから、本マニュアルを策定した。

2 本マニュアルの構成

【基本編】

(1)不登校の基本的な考え方	(2)未然防止
○ 「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的に自立する方向を目指すように働きかけること。 ○ 不登校の原因・背景が多岐にわたることを踏まえた上で適切にアセスメントを行い、支援の目標や方針を定め、多職種の専門家や関係機関とも連携・協働しながら「チーム」としての生徒指導体制に基づいて、個々の児童生徒の状況に応じた具体的な支援を展開していくこと。	○ 新たな不登校が生じない、児童生徒が毎日通いたいと思える魅力ある学校づくり・学級づくりに取り組むこと。 ○ 誰でも悩むことはあるということへの理解を促し、悩んだときに、人に話す・聴いてもらうことの重要性を伝えるための取組を行うこと。
(3)早期対応	(4)長期化への対応
○ 児童生徒の言葉・行動・表情に気を配るとともに、友人や教職員との関係、成績等の変化に対するアンテナを高くしておくこと。 ○ 児童生徒の気持ちを理解し、思いに寄り添いつつ、アセスメントに基づいて、支援の目標や方向性、具体的な対応策を検討するなどして、チーム支援を行うこと。	○ 登校を支援するのか、学校外の支援機関につなげるのか、休養を優先するのかなど、個々の心身の状況変化を見守りながら、目標の幅を広げた支援を行うこと。 ○ 学校が関係機関と連携する場合、保護者の理解が必要となるので、丁寧な説明と十分な配慮をすること。

【対応編】

(1) 欠席の状況等に応じた対応

- 不登校の要因や背景は多様かつ複雑であるので、SCやSSW等を活用して、チームによる組織的・計画的な支援を行うこと。
- 予兆をいち早くキャッチし、情報の共有、面談や家庭訪問の実施、欠席状況報告書（個人別）の作成等、組織的に対応し、全教職員で共通実践すること。
- 連続欠席3日目の対応は、校内ケース会議を開催してアセスメントを行うとともに、当該児童生徒に応じた支援計画を策定し、担任等による家庭訪問を行うこと。
- 連続欠席7日目または断続欠席10日目の対応は、小樽市教育支援センターに速報するとともに、校内ケース会議において支援計画を修正して担任等が家庭訪問を行い、必要に応じて関係機関と連携を図ること。また、当該児童生徒が登校できない場合には、保護者や小樽市教育支援センターと連携し、当該児童生徒の学びの場について、相談すること。
- 児童生徒本人と直接会うことができず、登校日で連続欠席30日に達した日の対応は、学校は小樽市こども家庭センターとSSWへ連絡し、今後の対応について相談すること。また、小樽市こども家庭センターは、学校からの連絡を受け、関係機関に連絡し情報収集するとともに、SSWと対応について協議し、当該児童生徒の現認を試みること。
- 小樽市こども家庭センターは、当該児童生徒の現認ができない状況が継続する場合や、緊急性が高い場合には、北海道中央児童相談所や小樽警察署に連絡し、対応を協議すること。

多様化する不登校に対しては、学校の力だけでは十分な支援が難しくなっている状況も見られることから、専門的なアセスメント力や知識・技能がますます必要とされており、学級担任一人ではできないことも、教職員や多職種の専門家、関係機関がチームを組み、役割分担することで、指導・援助の幅や可能性が広がります。

多職種の専門家や関係機関と連携し、支援者の負担を分散することにより、当該児童生徒への関わりの密度を高め、支援の質を高めることが大切です。